

令和7年度第1回柏市緑政審議会

1. 開催日時

令和8年2月10日(火)午前9時30分から正午まで

2. 開催場所

柏市本庁舎5階委員会室

3. 出席者

(1) 委員

落合委員, 鈴木委員, 泉水委員, 寺田委員, 平林委員, 松清委員, 三好委員, 柳井委員

(2) 事務局

坂齊都市部長, 大部都市部次長兼公園緑地課長, 石川主幹, 居原田主幹, 高橋主幹他

(3) 受託事業者

(株)ポリテック・エイディディ

4. 議題

(1) 会長・副会長の選出

(2) 諮問「柏市緑の基本計画改定について」

(3) 柏市緑の基本計画の取り組み状況

(4) 各委員からの御意見（「柏市の緑」について）

5. 配布資料

資料 1-1 次第

資料 1-2 委員名簿

資料 1-3 席次表

資料 1-4 諮問書(写し)

資料 2-1 諮問について

資料 3-1 緑の現況

資料 3-2 施策の実施状況〔概要版〕

資料 3-3 市民アンケート結果〔概要版〕

資料 3-4 社会情勢の変化〔概要版〕

資料 4-1 各委員からのご意見について

参考資料 1 施策の実施状況〔全施策〕

参考資料 2 令和5年度市民アンケート結果(選択式)

参考資料 3 令和5年度市民アンケート結果(自由記述)

参考資料 4 社会情勢の変化(世界, 国, 県, 市の動向)

6. 議事(要旨)

○事務局挨拶 (大部都市部次長)

・・・・・・・・

(1) 会長・副会長の選出

落合委員を会長，柳井委員を副会長に選出した。

(2) 諮問「柏市緑の基本計画改定について」

事務局より諮問内容を説明，会長へ諮問書を手渡しした。

(3) 柏市緑の基本計画の取り組み状況

○事務局 (高橋主幹)

以下の内容について，資料に基づき説明

- (1) 緑の現況について
- (2) 施策の実施状況について
- (3) 市民アンケートの結果について
- (4) 社会情勢の変化について

○落合会長

それでは皆さんからのご意見をいただきたいと思います。

○松清委員

柏市では約 20 年前に市が主導して里山活動の担い手育成を行い，多くの団体が誕生しましたが，現状も当時の誕生した団体が活動を続けており，高齢化しています。60 代で始めた人が 80 代になってもチェーンソー作業を続けている現状が我々の周りで結構あります。ただそこを，高齢化だという話だけではなく，新規の人たちが，どこにどのような関わり方しているのかという視点でみると，なかなかそういうきっかけや場が少ない現実があると思います。

現代は 60 代では仕事をしていて，家庭菜園ならともかく，70 代からはじめてチェーンソーを扱うのは難しいのが現状です。50 代くらいから助走をつけて地域に入っただけのように，気軽に入れる場所をつくって，少しずつ年を経るごとにボランティア活動にウェイトを高めていくような流れをつくれなかつたとは考えていますが，なかなかアピールができていない状況です。そのため，市の施策としても，団体の活動などの取組を前面に出して，新規参加者が入っていけるような仕組みがあってもいいのかと思います。

アンケートでの緑の活動に関わっている人たちが少ないことに関してですが，緑に関わる活動がどん

な活動かをみると、ガーデニングなど個人的な園芸ニーズが高くなっているということが分かりますが、現実には、それをできる場所が減っていて、個人が園芸を楽しめる家の庭がなくなっています。また、パブリックなスペースでの花壇整備もできていません。あと、町会による道路花壇整備も昔は結構熱心にやっていたと思いますが、町会の高齢化ややりたい人がいても結局やる場所がない状況があります。

そういったことを踏まえて、緑の活動の場や機会の提供を今までのやり方から変えていくことが必要ではないでしょうか。そのようなことを総合的に考えながら、その地域や市民の意識にどういう背景があるのか、その背景に対してどうアプローチしたらいいのかを考えていけるといいなと思います。

○柳井副会長

緑の活動に参加したい若い人はいるけれど、受け止める場所や機会がないと思います。また、施策として後押しする時に、どういう後押しをするのか、お金の出し方などのフレームがないため、機材の貸出や従来の講座の開催に留まってしまっています。

若い人たちや子育て世代の女性が森の活動への参加が最近増えているなと思いますが、これまでのように「決まった場所・決まった時間に集まる」活動スタイルではなく、空いた時間に何か活動できるみたいなことや、支援の内容も、従来型ではなく、若い世代やそれ以降の人が入っていけるような支援の仕方を考える必要があると思います。この辺りは松清委員と全く、同意見です。

それからアンケートでは40代の現役世代の関心度が高い一方で、実際の活動参加にはつながっていない。これは「活動が行えるチャンス」が発掘できていないような気がします。また、20～30代も緑への関心は高まっているが、活動参加は進んでいないというところがあります。そのような若い世代のライフスタイルに合う、サークル的な活動であったり、東大柏の葉の「ちょい農」のように、ちょっと参加できる仕組みを考えていかなくてはいけないと思います。

○鈴木委員

アンケートを読んだ印象では「緑への関心が低い層が増えている」とあったと思いますが、緑に関心がなければ不満にも思わず、満足度に繋がらないなと思っています。「満足している」という回答があっても、その満足の質やレベルが下がっていて、ちょっと緑があれば満足している可能性があるもので、満足度に関してはもう一度整理したほうがいいと感じました。

あとやはり、公園や里山にも緑はあるにはあるけれど、普段、街中で緑にはあまり出会わないと思います。道の駅周辺には、谷津田、里山、湧水地もあって、実際には魅力的な自然のポテンシャルが多く存在していますが、そこの緑に気づいている市民は相当少ないと思っています。なので、市民が自然の魅力に気づけるよう、多方面からのアプローチが必要だと考えています。

また、カシニワフェスタで実行委員をやっていますが、「緑に遊びに来てね」だけでは広がりきらないと感じていて、緑以外の食育や収穫体験、ものづくりなど多様なプログラムを入れる工夫をメンバーで議論していますが、日常生活のなかで柏市全体の緑との接点を増やせたらいいなと常に感じています。

道の駅でも子ども向け収穫体験を始めましたが、食や農に関心のある人に初めてきてもらって、農地や

里山の存在に気づくきっかけになっています。こうした多様な枝葉を増やすことで、市民全体の緑への関心を底上げすることが重要だと感じています。

○三好委員

鈴木委員がおっしゃったように、満足度が増えているというのが、柏市では「都市と自然が融合している」といういわれ方を最近していて、その刷り込み的ではないですが、イメージから、市民が本当に自然が身近にあると感じることで、緑への満足度への気づきがあったのではないかと思います。

子どもの活動について、学校でのピオトープ活動など、子どもの自然体験が広く行われていることを引き続き進めていただきたいなと思っています。小さい頃から身近なところに自然があるんだという気づきを得ることで、将来の「緑への関心」が高まっていくのではないかと思います。そこから、親子で楽しむ活動やボランティア参加の広がりにもつながる可能性があると考えています。

あと、数年前に作成した冊子で公園を特集した際、公園を綺麗にしてくれている人の存在に気づく子育て世帯の保護者の声があったり、一方でゴミやたばこの吸い殻などが落ちていて嫌だという意見もありました。その他にも、「外で遊ぶと元気になる」「緑の中にいると生き生きしてる」「大人も気持ちいい」といった子育て世帯の保護者の気づきが書かれていました。こうした気づきを広げるために、子供たち、親子、若い親子たちが公園・緑に触れられるイベントや機会を増やしていくといいかなと思いました。

アンケートについては、夕方の光ヶ丘中央公園では、多くの子どもたちが走って遊んでいて、子どもたちだけで遊んでる光景をたくさん見ます。URの広場のところで球技をしていたりする子どもたちもたくさんいます。自主的に走り回り、遊んでいる光景が見られる。現在のアンケートは20歳以上が対象ですが、難しいとは思いますが、公園や緑を利用している子供たちの意見をぜひ取り入れていただきたいと思っています。そこから、私たちが気づくことが多くあるのではないかと思います。

○泉水委員

緑の関心に関しては、自分の中で一番関心を持っているのは、大堀川の桜並木です。市民参加の植樹によってつくられたと聞いており、家族が植えた一本の桜を毎年桜の季節に見に行って、その下で花見をしています。自分で関わったからこそ「自分ごと化」できたと感じています。緑の活動は第一歩のハードルが高くなりがちですが、なるべくハードルを低く、祭りなど申し込みがいらぬ、立ち寄り感覚で始められるものがあればいいと感じました。

もう1点ガーデニングの割合が急増した背景として、母や周りに聞くと、物価高騰の中でローリエや大葉などちょっとした植物ぐらいだったら、自分の庭で作りたいという意見が結構あるようです。一軒家でなくても、鉢植えや窓際で手軽に育てられるのがいいかなと思います。共働き世帯や学生など、忙しい人が増えており、公共の場で責任を伴う活動より、自宅で完結する園芸の方がハードルが低いと感じています。

○寺田委員

アンケート結果から、緑への関心はこの10年で世代差や社会状況の変化によって大きく変動していると感じました。今回の計画は「次の10年」に向けた政策の柱を考え、さらにその先の10年まで読んで考えないといけないと感じています。

まずこれまでの緑の活動や維持管理は、今の80代くらいの団塊世代に大きく依存してきたところがどうしてあると思います。里山トラストさんや手賀沼森友会さんなど、当時60代だったアクティブシニアと呼ばれた方々が次々と団体を立ち上げ、活動を発展させてきましたが、規模としてその代が大きかったのも、特に民有緑地管理の担い手に関しては次の10年を考えると縮小してしまうと思います。

今後10年を見据えると、講師育成や参加のきっかけづくりを行政がどうサポートしていくかという点で、今やり方を少し刷新しておかなければこのまま縮小していつてしまう危機を感じています。

また今後10年は、インフラ更新が重要なテーマになると考えています。柏駅前では大規模な再開発が進んでおり、次の10年の柱として、柏駅前のオープンスペースをどうしていくか非常に大事だと思っています。

柏市の緑の基本計画は、様々な施策をとにかく並べる構成になっており、後から必要な施策を実施しやすいという点で合理的だと思いますが、改定にあたっては、アンケート結果なども踏まえ、この緑政審議会では次の10年で特に重要となるテーマを明確に共有することが大事だと思っています。

○平林委員

子どもと接していると、自然の“気持ちよさ”を体感したことがない子が結構いると思っています。とげとげ、ざらざら、痛いなど自然に触ったことがない子供がいますが、みんながいいよと言っても一番初めのとっかかりの体感がなければ楽しさは感じられません。これまでの政策で緑地は増えてきているデータもあるので、広がった緑を今度は市民が存分に感じていただいて気づきに繋がるものがあるといいと思います。

また市民参加に関して、継続して参加してもらうことは非常に難しいと感じています。気軽に参加でき、自分の都合の良いときに関われる仕組みが必要だと考えます。ただ、緑は成長し続け、季節によって管理内容も変わるため、継続的に支える“土台となる人”がいる上で市民参加の人たちが入りやすい環境をつくるのがいいかと思いました。

○落合委員

前回の基本計画では数値目標を設定していましたが、例えば資料3-1の10ページ、新しい公園整備などで面積は増えている一方、生産緑地など民有地の開発による減少を行政が止めきれていない状況があります。その際にこの数値目標がいいのかどうかこれからは考えていかななくてはと思っていました。当時は「数値目標を作る」ことが政策の流れでありましたが、今後は施策が実行されているかどうかを期間を決めて定期的にチェックして進行状況を確認することが重要ではないかと思いました。

また、資料3-3の29ページのアンケートのまとめに関しては、これまでの施策に対して市民は大体

満足していますが、その施策をいかに進めていくかが今後は大事だと思っており、次期計画をつくるうえで、今回の審議会で出された多様な意見を施策に反映する良い機会だと考えています。

(4)「柏市の緑」について

○高橋主幹

以下の内容について、資料に基づき説明

(1) 各委員からのご意見について

○落合会長

実際に経験したり実務としてやっている中で、思うことをお聞かせください。先生方は少し違う視点でもご発言ください。順番にお願いします。

○松清委員

今回の計画などを含めて緑の基本計画は公園緑地課が中心となるため、公園などが中心になるのは承知の上で、そのようなパブリックな緑と、民有林の管理・保全是別枠で考える必要があると思っています。

柏市全体の緑は、20年前は約1000ヘクタールあったが、現在は約800ヘクタールと、200ヘクタールほど減少しており、開発による減少は避けられない面もありますが、「仕方ない」で済ませず、ゼロカーボンセットや緑のCO₂吸収などの面から民有林を大事にしていく必要があると思います。

今回のアンケートは一般市民が対象でしたが、民有林の地権者などから維持できない理由や課題などを把握して情報を市民にも共有することが重要と考えます。

現状として管理されていない民有林では、市民から地権者に対してのクレームになっていて、それが地権者の負担になっている状況があります。倒木・雑草・景観悪化などが市民のクレームにつながり、地権者の負担が大きい状況が続いています。

例えば、令和元年の台風後には、倒木対応として住宅地に隣接する林を大規模に伐採したところが多く、結果として空き地化し、それが雑草の問題によってまたクレームになっていたり、お金を使って管理しても地主に対しての見返りが一切ない状況が、民有林を持っていてもしょうがないという考えに至ってしまっています。

こうした現状を、計画の中で市民にも課題として存在することをまず知ってもらうことが重要だと考えています。社会的には緑の総量の保全やCO₂の問題なども含め、解決策を議論して、何かできる人はやりましょうというきっかけづくりが必要で、特に広報の部分が必要だと考えます。

三好委員のお話にもあったように、子どものアンケートをぜひやって欲しいと思っています。子ども時代の緑とどう関わってきたか、緑の情報をどうインプットしてきたかは将来大きく影響すると思っています。

子どもが緑に関わる機会や体験活動の取組はされているものの、一部でしかなかったり、学校全体で取り組めていないところがあるので、もう少し子どもたちとの関わりを深めていく部分が必要だと感じます。例えば公園遊びだけでなく、自然としての緑に触れ、その価値や意味を学ぶ機会があるかないかでだいぶ違うような気がします。

10年計画の視点では、今の小学生が10年後に20歳になったとき、どのような緑への意識を持つかを追跡することも面白いと考えています。

公園に関しては、お金をかければいい声に繋がりますが、維持費の問題とも慎重に見極める必要があると思っています。公園に「決まった使い方」を設定しすぎると、それがルールになって利用が制限されてしまう可能性があります。公園でプレーパークを行う団体は、公園の制限の中でできることが限定されてしまうという課題が出てくるかと思います。そのため、公園の管理方法・運営の仕組み・公園の定義そのものをもっと多様化してもよいのではと感じています。

○三好委員

子どもに関わる活動が多いのでわかることは、子ども時代に自然を体験する、木や花や虫に触れる経験をしなかった子どもは、大人になっても自然に対して苦手意識を持つことが多いという印象があります。逆に、学校のビオトープ活動だけでなく、学校以外でも緑の中で「気持ちいい」と感じる体験の場が増えていくことはとても重要だと思っています。道の駅の農体験のように、さまざまな場所で自然体験の機会を提供し、それらが連携して子どもを育む環境をつくるのが望ましいと考えています。

公園では多くの子どもが遊んでいるので、子ども自身の意見をぜひ聞きたいと思っています。子どもが自然や公園で遊ぶ中で、何が良いのか悪いのか、大人が捨てたゴミやたばこなどについて、子どもがどう感じているのかを聞いてみたいと思いました。

また、市民自身が身近な緑を大切に思って、花植えや植林や、平林委員もおっしゃったように自分が植えた花のイベントなど、長い目で見守れるような身近な環境が大事だと思います。こうした体験を通じた次世代育成の視点も大事だと考えます。

あと、カシニワフェスタでは、バス車内で動画を流すなどの取り組みが行われています。市内で緑に関する情報や映像が目に触れる機会があると、「柏は緑が多い」というイメージづくりにつながるようなメディアなどを活用した作戦があるといいかと思いました。

○泉水委員

私の幼少期の体験として、サツマイモ掘りや木の名前調べなど自然に触れる活動をしていて、最初は木に触れることに抵抗がありましたが、みんなで活動するうちに抵抗がなくなっていった記憶があります。ですので、子どもたちが自然に触れる“半ば強制的な機会”があるいいと思いました。

また、資料3-3の25ページのアンケート結果では、10代が「スポーツ施設・ボール遊びができる施設」について他世代よりも強く求めていることが分かります。自身の経験として、市内の公園はボール遊び禁止が多かったと感じています。マンションなど住宅が近い公園では規制が少ないかもしれませんが、市内の公園でどこもかしこも規制すると「誰のための公園なのか」という疑念を抱いてしまいます。公園は幅広い世代のための場所ですが、子どもたちが自由に遊べる公園も必要だと考えています。

○平林委員

私も自宅周辺の街路樹の足元や雑草の管理に住民として苦労していますが、住民が自主的に草刈りをしたり、好きな植物を植えたりするお宅もあり、それが周囲にも広がって自分の家の周りをきれいにしたいという「自分ごと化」が広がっています。

例えば小青田の町会では、町会長が近隣の竹林を放置せず管理し、利活用も考えながら整備していらっしゃいます。自分の住んでいる地域が、「きれいであったり」、「みんなが困らないといいな」といった、自分ごとの意識によって綺麗な部分が広がっていくのではないかと考えています。なので、こうした自主的で地道な活動を称賛することで広がっていくといいと思います。

子ども目線というなら、公園の利用ルールや禁止事項が大ざっぱなため、親が「問題を避けたい」という意識から過剰に制限してしまう傾向があると思います。しかも、新興住宅地では特にトラブル回避の意識が強く、禁止事項を広く解釈しがちです。

本当に禁止されている行為を明確に示す機会がイベントなどであると、誤解が減り配慮すべき事項が明確になると中高生が公園に帰ってくるのではと思っています。柏たなか公園では、部活帰りの中高生がすごく周りに配慮してキャッチボールやサッカーをやっているの、周りで駄目という人もいません。そのように見極めることを促してあげると利用が広がるのではと思っています。

また、公園に人が集まるとみんな汚い公園は嫌なのでマナーも良くなったりするのではと期待していますが、あまりよくなっていないのが現実なので、もっと啓発できればと思っています。

例として田中小学校では、1年生の生活の授業でオナモミ・ジュズダマ・どんぐりなど「遊びに使える自然物」を集める活動があります。子どもたちはどこに何があるか分からず、大人に聞いたり地域の人に尋ねて自分の住んでいる付近をかけずり回ると、その過程で「こんな場所にこんな自然があった」「景色の良い場所がある」など、子どもたちが自然の中で遊ぶきっかけになっています。地域の人との話し合いや学校からの小さなアクションが、地域全体の緑に目を向けるきっかけになっていると感じています。

○鈴木委員

落合委員が指標の話をされていましたが、「1人当たり何㎡」といった面積で考える時代ではないのではと考えます。平林委員がおっしゃっていた緑に触れる時間をいかに作るかという意味で、指標にするのは難しいかもしれませんが、「1人当たりの身近な緑に触れる時間」を計画の中で意識できると良いと思っています。

身近な緑だけでなく、手賀沼周辺の豊かな自然も含め、市内の緑を楽しむライフスタイルを築く必要があると思っています。計画や施策を通じて、“緑を楽しむライフスタイル”がどんどんできていくとい

うイメージを描けるといいと考えています。

例えば、手賀沼周辺では谷津田や里山が、今後5～10年で減少していく気配を感じています。松清委員がおっしゃっていた、70～80代メインの団体は働き方やライフスタイルの変化により、若い世代がそのまま活動を引き継ぐのは難しいと考えています。これまでの知識や経験を継承しつつ、新しい団体や仕組みづくりを行政が主導していく必要があると思います。

また、手賀沼で子どもたちとビオトープ整備活動をしています。参加者は我孫子・流山・柏など広域から集まって来ています。柏の緑であっても、担い手は市外の子どもや住民になる可能性が十分にあります。農業体験なども都内から参加者が来るように、柏という立地を活かせば、地方都市では難しい広域的な担い手づくりの仕組みが実現できるのではと考えています。

○寺田委員

資料3-1の4ページの柏市の近年の樹林地の残存消失に関して、公的に担保されていない民有地の樹林地や生産緑地指定されてない農地について、どうするかが課題になっています。そして生産緑地も2032年に再度の見直しがあり、高齢化により継続しない農家が増える可能性があります。

樹林地の研究をしたときに、柏市のアーバンフリンジに向けてスプロールが起き、戸建住宅が建っている状況が確認されています。一方で、柏駅周辺では空き地・空き家が増え、大きな敷地が分割されて庭の緑が確保しにくい住宅が増えてきています。また、スプロールして周辺の緑は減少しているのに、内部には空き地が増えるなど、コンパクトシティ政策が十分に機能していないと感じています。

民有地の農地、空き地、樹林地それぞれに応じた適切な対応が必要であり、特に「優先順位づけ」が重要だと考えています。

例として、資料3-1の4ページに挙げた樹林地の変化について、都市計画道路など、将来的に開発が避けられない場所もある一方で、公園が少なくオープンスペースが不足している地域では、民有樹林地を市民緑地化するなどの活用が公園化するよりコストもかからないはずで。

すべてを一律に保全しようとする、結果的に緑が減少する可能性があるため、何を優先的にするか重要になってきます。例えば、樹林地はカシニワ制度へ組み込んだり、農地は生産緑地が売却される際の公有地化に優先順位をつけたり、空き地についても、カシニワ制度や地域住民のマネジメントを前提に、どこでオープンスペースの管理に関わってもらうなど、民有地の状況悪化を前提として、緑の基本計画では「優先的にどこをモデルにしていくか」を明確にする議論が不可欠だと考えています。

樹林地に関して言えば、施策として例えばカーボンクレジットの検討が20年前から盛り込まれており、先進的ですが十分に進んでいない現状かと思います。ただ、私有地として適切に管理されている沼南の緑はクレジット発生の条件を満たしているため、企業との橋渡しができれば、管理資金の循環が生まれる可能性があり、こうした新しい施策も含め、民有地の活用・保全策を検討していく必要があると考えています。

公園の老朽化した社会インフラの更新については、今回の取り組みの中でも事務局の目玉だと思いま

す。特にトイレやベンチなどの特定公園施設が老朽化しており、サービス水準を維持するためにはきちんとデータをとって、順次進めていくべきだと思います。

それに加えマネジメントの部分ですと、柏市地域住民団体等との協働による公園管理は、自治会以外の多様な団体も参加できる制度で、5年ほど運用されていると思います。柏市だと福祉団体が受託し、障害者の就労の場として公園管理を位置付けていたり、お金ももらって委託を受けて多様な使い方ができる制度であるにもかかわらず、多分ご存じの方はほとんどいらっしやらないかと思います。広報や宣伝など市民に対するアプローチが不足して、ニーズが引き出せていないと感じています。制度はあるけどうまく使えていない課題があるので、制度を柔軟に運用し、公園ごとに地域ニーズに合った特色づくりも可能であると思います。カシニワ制度も含め、もっと使ってもらうために市民へのアプローチを強化する必要があると感じています。

緑の基本計画における「拠点」の位置付けですが、計画図でも大きく示されていますし、非常に重要だと思います。例として北部の大青田の森は里山トラストが約20年間管理されて、県内の里山管理の先駆けでしたが、昨今の物流需要により約半分が失われてしまいました。

社会的ニーズによる土地利用転換は避けられませんが、拠点として位置付けられた緑が失われた際の対応が不十分だったと感じています。例えば、工場立地法の30%緑地以上の緑化やミティゲーションを求めるなど、拠点に相応しい措置を企業に求めるべきだったと考えています。昨今は特に大企業の方は企業側も環境貢献が投資家の関心を高めたり、経営へのプラスになると考えていると思いますので、次の10年では、この例を反省点として今後は拠点の位置付けや対応方針を見直し、情勢に応じたアクションを整理する必要があると考えます。

またJR柏駅前には、緑の基本計画で明確に拠点とされていたかは定かではありませんが、アンケート結果から見ても「緑化の拠点」として位置付けるべきエリアだと思います。駅前のオープンスペースや緑は他都市と比べても明らかに不足しています。

既存の緑を守るというより、駅前を「緑化の拠点」とすることですが、そのためには、民間企業へのインセンティブをどう与えていくか、認証制度、エリアとしての緑化方針などを明確にすることが必要だと思います。UDC2など都市計画・景観の枠組みと連携しながら、再開発と連動する形でオープンスペースや緑の機能を高めていくことで、郊外に広がっていく形になると思います。

計画の見せ方に関しては、行政計画は一般市民にほとんど知られていないと思います。最近はオープンハウスをしっかりとやって更新を端的に伝えたり、広報かしわだけでなく、SNSなど多様な手段があります。そうしたときに100~200ページの計画書をそのまま提示しても関心を持たれにくいので、市民向けの「概要版」「訴求版」が必要だと思います。

鈴木委員がおっしゃっていたように、緑との関わり方や緑のある暮らし方など、市民目線のメッセージを盛り込むべきだと思います。例えば「関わり方Aにはカシニワ制度」「関わり方Bには街区公園管理委託制度」など、行動と制度の関係が見える形にすると、市民が一步踏み出しやすくなるかと思います。緑の基本計画をそのまま提示するだけでは市民の行動変容につながらないため、届けたい相手を意

識した見せ方が重要だと考えています。

○三好委員

最近森が宅地化された場所では、庭や車庫部分が全面コンクリート舗装の住宅が増えており、緑が全くないお家が目につきます。例えば「緑の車庫はかっこいい」「柏市は緑のある庭づくりを推奨している」といった形で、不動産会社や建築会社にアプローチできるのではないかと、道を歩いていて思いました。

○柳井副会長

緑の基本計画には、気候変動・生物多様性・ウェルビーイングといった大きな視点は取り入れる必要があると考えています。また、柏市の特性を踏まえると、子ども目線の視点や、近年注目される災害時と日常時のフェーズを取り払う「フェーズフリー」も、公園や公共施設整備に取り入れるべき概念として出始めています。これらのキーワードを、10年先を見据えた計画の中で整理する必要があると思います。

さらに緑の基本計画では「まちづくりとの関係性」も重視すべきだと思います。緑を守ること自体が目的ではなく、緑を通じて“良い暮らし”を実現し、柏市に住み続けたい・子育てしたいと思えることが大事になっていきます。

そのためには、緑だけの視点ではなく、社会課題への対応や他分野との連携が重要になってきます。例えば、高齢者の孤立解消に花壇づくりが役立つ、公園管理が新しい雇用の場になる、都市農業との連携による緑の拡大など多様な分野と結びつけることで、緑のファンを広げることになるかと思います。緑を入口にするだけでは弱く、子育てやアートなど、緑はいろいろなところ手をつなげるので、それを意識した基本計画にできるといいと思います。

市が進めている「居心地のよい公園づくり」、素晴らしいと思います。特に狭小・老朽化した街区公園をどうするかというところで、例として他の先進的な取組だと、乳幼児向けの遊びやすいコーナーと子ども向けの遊び場などを分けたり、富山や北九州のように、街区公園でエディブルな植物を育てる取り組みや菜園を作って収穫したものを食べたり、行政としてはルール上難しい面もありますが、実際に実践している自治体もあり、魅力づくりの一環として重要だと思います。

これらの取り組みは緑の基本計画ではなく、「居心地のよい公園づくりプラン」側で進めるべき重要なテーマだと考えています。

また、民有地の樹林地保全では、国が都市緑地法を改正し、特別緑地保全地区の指定目標や機能維持増進事業など、財政支援を含む大きな流れの中で、他自治体では、限られた予算の中で「すべてを守る」のは困難なため、優先的に守るべき緑地を客観的に選定し、市民にも納得される形で指定する取り組みが考えられています。川崎市では昔からやっている先進事例です。柏市は20年前の緑の基本計画策定時に、すでに緑地の機能評価を行い、緑地保全のパターンを決定し点数化する手法を導入しており、これを活かしてメリハリをつけた保全を考えるといいと思います。

それから都市開発分野では、国交省が「TSUNAG」などの認証制度を通じて、優れた緑地づくり評価し、国の施策や ESG 投資と結びつける動きがあります。また自然共生サイトや民間の認証機関もたくさんあります。これらの認証を受けた場所は、質の高い緑が持続的に管理されている証拠であり、柏市でもそうした場所を増やしていくことが望ましいと考えます。「公園を増やす」だけでなく、色々な認証制度や柏市の緑化指針や景観アドバイザー会議などの指導制度を利用して、民有地を含め公園の緑化・樹木管理の質を向上させることが重要かと思えます。

また、鈴木委員が提案した「1人当たりの緑との触れ合い時間」という視点が面白いと思いました。緑の基本計画では、量と質と時間の物差しを考え方の中にいれられたらと思います。

20年前に策定した「88 施策」は、施策ごとに進行管理が明確になった点で画期的でしたが、今後は、重点プロジェクトやリーディングプロジェクトのような、地区やプログラムを絞って“体感できる施策”が必要かと思えます。計画の実効性を高めるには、PDCA サイクルが重要で、計画策定（PLAN）だけでなく、実行（DO）して審議会で CHECK して見直しの ACTION をするという枠組みがありますが、私は DO が不足していると感じています。

○落合会長

緑の基本計画は、総合計画や都市計画マスタープランのもとにあるため、この計画単独で制度を決めることはできないですが、発信する役割は果たせるので、私としては計画内容をできるだけ中身の濃いものにしたいと考えています。これまでの基本計画で用いられてきた「まもる・つくる・そだてる」という枠組みは、一般的ですが柏市でも引き続き有効な考え方だと思います。

今後は、「88 施策」をどのように色分け・再編・充実させるかという具体的な議論が必要になると思います。柳井委員がおっしゃるように「作りました、あとは役所とボランティアでお願いします」という形では不十分で、審議会の位置付けを変えて、推進会議としての役割を持たせるべきだと考えています。計画の施策群の中に、「全体をどのように進めていくか」という推進体制・運営の項目を明確に入れるといいと思います。

柏市は手賀沼をはじめとする独自の地形・環境を持っているため、これを活かした計画づくりが必要です。駅周辺の高度に発展した都市空間と、東側・南側の田園的な地域とのバランスをどう取るかが、緑の基本計画の大きな流れかと思えます。他市にはない強みを持つ柏市だからこそ、それを活かした内容にしていくべきだと考えているので、いろんなご意見をいただければと思います。他にも一言ご意見あればお願いいたします。

○松清委員

千葉市や四街道市では市がプレーパークを運営し、NPO に委託して常時開設していますが、プレーパークは子どもが自由に遊べる場であり、公園や緑地の管理と組み合わせることで、日常的な整備と安全な遊び場づくりを両立できる可能性を感じています。柏市の広いエリア特性を踏まえると、各エリア

に1か所程度「子どもが自由に遊べる森」のような場を設けることもいいと思います。大人の管理者が常駐しつつ、子ども自身がルールをつくり自由に遊べる場を確保することで、モデル的な取り組みとなり、他の公園にも波及する可能性があると考えます。

また、一般向けの概要版だけでなく、子ども向けの「緑の基本計画（教育版）」を作成してはどうかと考えています。学校の授業で取り上げてもらって、子どもの意見をパブコメで返してもらうのも面白いかと思います。「公園どう思う？」といった単純な意見募集ではなく、柏市がこの計画で緑を保全して活用しようとしていることを子どもにも伝え、その反応を受け止めて、良いアイデアは、実際の行動に反映できると面白いと思います。

○落合会長

皆さんの想いが色々おありですが時間でございます。

次回は4月頃で、今回の皆さんの意見をみながら基本理念、将来構想という具体的なテーマ等が出てくると思いますのでまたご意見いただければと思います。

以上で本日の審議会は終了といたします。

7. 傍聴者

3名

以上